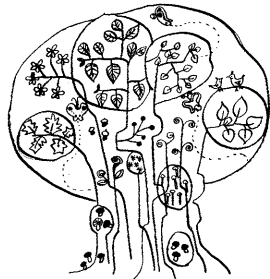


木の心

小山千秋



木に仕える樹木医となつてから、私が少しずつ耳にした「木からのメッセージ」を一部紹介します。

木のつぶやき

毎日よく雨が降りますこと。風も吹き、冬になると雪も降り、海も見えて静かなよい所です。あちらこちらに私の仲間がいます。ちよつとのつもりでずいぶん長く眠つてしまい、幾つになつたのかもわかりません。でも、台風だけは困ります。台風は二百十日(九月一日ころ)には必ずやってきて、あたりを荒らしまくるのです。また一年に何十回も暴風雨が

あり、そのたびに枝を折られたり、梢がふっ飛んだりします。雨は山を駆け流れ土砂を押し流すので、どんどん根を伸ばしてしっかりと岩盤にしがみ付いて身を守らなければなりません。聞くところによると、人間という動物が来て山を荒らしているのだそうです。でも、こんな上の方まで来ないでしょう。

子どものころ、親から「真つすぐに伸びるから杉まきなんだよ」と言われたことがあります。でも私は、どうしてこんなにズングツチョズン(ズングリ体形)なのでしょう。谷間のスマートな仲間がうらやましいです。長生きだけが私の取りえです。

ある日、人間が私たちを切りに来るといいうわさが伝わってきました。何でも幕府に献上するコケラ茸（板を重ね合わせて屋根をふく）の板を作るとかで、下の方では石（木材の容積単位）の大きい木から切り始めているそうです。

そのうち本当に人間がやってきて、木に斧で印を付け始めました。私の所へもやってきて、

「こいつあたいけど、チャッチャくて石がねえ、石ころみてえで硬くて駄目だ」

と行ってしまいました。幸か不幸か安堵したものの、切り出される仲間を見送ると淋しいものです。

年を経て、また人間たちがやってきました。世界遺産の旗を持って近づき、「これだこれだ、世界で一番古い縄文杉だ」と言って縄を巻いて帰りました。役にも立たない老骨が、世界遺産だなんて恥ずかしいことです。木の気も知らないで勝手なものです。

そのうちに人がわいわいやってくるようになり、

根元を踏み固めるは、触るは、たたくは、毎日たまるストレスに困り果てました。

間もなく周りに木道が作られ、看板が立てられました。こうなったら居直って、来る者を迎えてやろう。心を据えたら気が楽になりました。

年をとると体のあちこちにあかやほこりがたまりますが、いつの間にか二十種類もの草木が寄生し、花を咲かせて虫を呼んだり鳥が来たりして、まさに雲上の小さなパラダイスになりました。

ある虫の話

里山では国蝶オオムラサキの幼虫が、おいしそうにエノキの葉を食べています。その様子は、乳児を抱いて授乳する母親の安らぎに似ています。一所懸命食べていると、やがて、

「もうやめてね」

とサインが出て葉がまざくなります。すると虫は、

ほかの所に食べ替えます、これを何度か繰り返すうちに、虫喰い葉（穴だらけの葉）になります。

すると虫は、ほかの葉に移ってまた食べ始めます。葉の働き（同化作用）を妨げない心遣いでしょうか。

どの虫にも食性（食べ物に対する習性）があり、食べる植物は決まっています。植物は皆毒で身を守っていますから、やたらに食べると中毒して死んでしまいます。食性の植物については、免疫を与えられていると考えられます。

虫が増え過ぎると、鳥が食べて調整をしてくれます。つまり虫は、餌となって鳥を養っているのです。これが生態系（自然界で生物が生きていく仕組み）で、「食物連鎖」ともいわれています。植物は生態系の底辺を担う役割を果たしているのです。自然の母ともいわれています。生態系の頂点に立つて自然の恵みを存分に享受している人間が、更に利益を追求して、森林や海洋資源を乱獲し、生態系を壊して

いることは誠に遺憾なことであります。

木の悲しみと喜び

私の名前はアメリカヤマボウシなのに、勝手にアメリカハナミズキと呼んだり、一番嫌いな道路に植えられたり、何と運の悪いことか。これではいつまで生きられるかわかりません。公園の水辺で半日陰の所に植えられた仲間には、爛漫の春を謳歌して喜んでるのに。

日本の国花サクラは、吉野山に自生（好きな所に一人で育つ）するヤマザクラで、雨が多くて水はげがよく、しかも日当たりのよい斜面に群生しています。

八代將軍徳川吉宗公は、各地の堤防に植えさせて名所をつくり、木を喜ばせながら人々も楽しませる花見を奨励しました。このことは、集まる人に土手を踏み固めてもらう結果となり、一石三鳥の得を取めたといわれています。

現在のサクラはヤマザクラの変種、ソメイヨシノという品種で、本当に世界美しい花です。

箱根や日光の旧街道に残る並木は、史跡として保存されていますが、今日の街路樹は葉の付いているうちに丸坊主に切られるので、切口が瘤状になっています。木から嘆きの声が聞こえてきます。

木の怒り

慈しみ深い母なる木でも、時には憤然と切れることがあります。狭い歩道に植えられ、苦しまぎれに道路の舗装を押し上げたり、根元の石仏を抱え込んだり、校庭の鉄棒に噛みつき、飲み込んだ例もあります。木は成長を邪魔するものに対して、正しく強い自然の力を行使しているのです。

木の文化

ヨーロッパの石の文化に対して、日本には木の文

化があります。これを象徴する法隆寺の建築や仏像が世界遺産に登録されたことは、伝統技術の粋と歴史の意義が評価されたものと思われれます。

建立千三百年、昭和の大改修を仕切った宮大工棟梁の故西岡常一氏は、著書『木に学べ』（小学館）で、「木も人も環境に生まれ長所を持っている。これが癖である。多くの職人と多くの木の癖を組み合わせて、より丈夫で美しい建築を仕上げるのが棟梁の責務である」と言っています。

癖のある木は素直な木よりも強く、適所にあっては何倍もの力を発揮します。

樹齢千三百年のヒノキの柱が、千三百年間法隆寺の堂塔を支えていたことが、改修で確認されたことも述べています。

よい建築には、職人の魂と木の心が、融和してこもっています。これが、人の心に静かな感動と合掌を誘うのではないでしょうか。

公園の木

一九〇三年、日本最初の西洋式公園として日比谷公園が誕生しました。設計者の本多静六（一八六六～一九五二／林学博士・東京大学教授）は、百年後の東京の都市環境（人口・文化・国際化・交通）を予見して設計しました。

馬車や自動車が並んで走れるほどの園路、広い芝生にきれいな花壇、広場や音楽堂、図書館、運動場、動物園、池の噴水、レストラン、公会堂など、当時の日本人には奇想天外の別天地であったと思われるます。

予算の都合で一メートルくらいの木を植えた当時の写真は、広い苗木畑のような感じがして、中に一本だけ樹齢四百年の大木が植えられました。その名も「首かけイチョウ」と名づけられ、標示板にその由来が説明されています。

百年の間に、木は順調に成長して、首都東京の顔として役割を果たしています。

明治神宮の森

明治神宮神苑の造成は、国家の事業として執り行われ、設計には本多が指名されました。

設計に先立ち、総理大臣から神宮にふさわしい針葉樹の森に、全国からの献木十万本を植えるようにとの要望があり、樹種については本多の林学的思考とかなりの隔たりがあったようです。しかし、学者としての信念を貫き、説得に努め、ようやく総理の了解を得ることができました。

植栽設計と管理計画の概要は、

- 一、百年後の東京は、世界有数の国際都市になり、公害都市になる。
- 二、代々木の地を好み、都市公害（大気汚染）に耐えられる木を植える。

三、邪魔・危険（倒木・枯れ枝落下）な場合以外は、一切木に触れない。

四、落葉・枯れ枝は、すべて森の土に戻す。

ちなみに新しく植えられた木の種類は、クスノキ、シラカシ、スタシイ、イヌツゲ、サカキなどの常緑広葉樹で、公害に強いエリートたちです。

これらが、百年にわたって演じた成長のドラマが現在の森です。人工の植栽林が自然淘汰されて、新しい自然林に変わることを「天然更新法」といいます。大都市の人工林としては、学術上貴重な森といわれています。

日比谷公園を「新劇」にたとえれば、神宮は「歌舞伎」の森ともいえます。舞台役者は照葉樹といわれる暖地性の常緑広葉樹で、葉の表面に光沢があり、最も公害に強い木で、神宮には最適な木だったのです。

法隆寺を支える木も、匠の心と技によって世界遺

産の重責を担っています。このように、木は生きて一生、枯れて一生、二生の働きをして朽ちていきます。

木の教え

昭和中ごろまでの田舎の子どもたちは、物心ついたころには、庭や道端で草や虫と遊び、学齢期には木登りや魚とりをしたり、小鳥やウサギを飼ったり、川や海での水浴びなど、自由奔放な遊びに育てられたようなものです。私もその中の一人ですが、今にして思えば、自然は、学ぶ者に対して無限の教えを授けてくれています。

私は、木にお仕えする樹木医、自称「木人間」ですが、尊い木の教えを伝える通訳として、「木の心」を伝え、よりたくさんの「木の恵み」を、一人でも多くの方が受けられるよう努めたいと思っています。

（樹木医）